

研究報告

がん関連領域の認定看護師教育課程で実施している教科目
「看護倫理」に関する実態調査

"Nursing Ethics" Executed by Certified Nurse Curriculum in Field of Area Related to Cancer Nursing

富 律子¹⁾

Ritsuko Tomi

本研究の目的は、がん関連領域の認定看護師教育課程で実施している必須科目「看護倫理」の実態を明らかにすることである。研究方法は質問紙法である。がん関連領域の認定看護師教育課程を設置している7教育機関を対象として質問紙調査を実施し、4教育機関から回答を得た。看護倫理の教育目標について、4教育機関が看護倫理の基本的知識とコア概念の理解および倫理的諸問題について状況分析し、看護師としてとるべき行動を決定する能力の修得をあげていた。授業内容は、倫理原則・患者の権利・アドボカシー・ケアリングなどの看護倫理のコア概念や基本的知識、看護職者の行動の拠り所となる日本看護協会：看護者の倫理綱領や国際看護婦協会（ICN）：看護婦の規律および看護師が日常直面する倫理的問題、最近のトピックスである情報管理（個人情報保護法）・遺伝子診断/治療と倫理・生殖医療などであった。授業形態は講義法やグループワーク学習法および事例検討が取り入れられていた。これらは、教育目標や看護倫理という教科目の特性から、学生自身が既習の知識を活用し価値観の多様性を認識した上で、状況を分析推論し看護職としてとるべき行動を決定する能力を育成するうえで有効な方法と考えられる。

Abstract

The purpose of this study is to clarify the realities of indispensable subject "Nursing ethics" executed by the certified expert nurse curriculum in the area related to cancer nursing. The research method was a questionnaire method. The questionnaire investigation was executed for seven educational institutions that set up the certified expert nurse curriculum in the area related to cancer nursing, and the answer was obtained from four educational institutions. About an educational goal of the nursing ethics, four educational institutions analyzed basic knowledge of the nursing ethics, understanding of the core concept, and analyzing of ethical various problems, and the ability to decide the action that had to be taken as a certified expert nurse. The course content was ethics principle, a patient's right, an advocacy, a caring, and Japanese Nurses' Association (JNA): nursing person's Code of Ethical Practice and International Council of Nurses (ICN): Code of Ethical Practice and Information management (the Personal Information Protection Law) of the recent topics and the gene diagnosis, and the medical treatment and an ethic and reproductive medicine. As for the class form, the lecture method, the group work study method, and the

Received : November. 30, 2007

Accepted : March. 3, 2008

1) 横浜市立大学医学部看護学科

case examination had been taken. From the characteristic of the nursing ethic, a student utilizes knowledge of the having learned already and recognizes variety of the sense of values, and these are effective methods to develop the ability to decide the decision making as nurses.

I はじめに

医療の進歩は、高度化専門分化する医療現場に臓器移植や遺伝子治療、生殖医療など新たな倫理的諸問題への対応を迫るようになってきた。同時に、患者の人権をはじめ倫理的諸問題への医療職者の意識や対応が問題となり、適切な倫理教育の必要性が指摘されている^{1) 2)}。倫理的行動の基盤となる倫理的感受性や倫理的意思決定能力は、基礎教育および卒業後教育・継続教育において一貫して取りくむことにより育成することができる。医療現場で看護ケアの質の向上の牽引的役割を期待される認定看護師の教育課程では、「看護倫理」が必須科目となっている。特に、疾病や治療の特性から、がん関連領域の認定看護師は、より多くの複雑で困難な倫理的問題に遭遇することが予測され、看護ケアにおける価値判断や倫理的諸問題への対処は、患者へのケアの質に大きな影響を与える。従って、長期的展望をもった認定看護師教育課程および継続教育における倫理的能力の育成が必要と考えられる。特に、認定看護師教育課程で実施される“看護倫理”教育は以降の継続教育の基礎となることから重要である。しかし、現状では、認定看護師の倫理的能力や倫理教育に関する関心は薄く、わが国の認定看護師の倫理教育や倫理的諸問題の体験等を扱った研究は少ない^{3) 4)}。

そこで、がん関連領域分野の認定看護師教育課程で提供している教科目「看護倫理」の実態や課題を明らかにする事や、倫理的能力の育成に向けた継続教育における“看護倫理教育支援プログラムの構築”に関する検討が重要と考える。

II 研究目的

本研究の目的は、がん性疼痛看護、がん化学療法看護、乳がん看護、皮膚・排泄ケアなどがん関連領域分野の認定看護師教育課程で実施している必須教科目「看護倫理」に関して、教育内容、教育方法など実態や課題を明らかにすると共に、がん関連領域に勤務する認定看護師の“看護倫理”の継続教育に関する基礎的情報や示唆を得ることである。

なお、本研究で用いるがん関連領域とは、がん性疼痛看護、がん化学療法看護、乳がん看護、皮膚・排泄ケアをいう。

III 研究方法

1. 研究対象

がん性疼痛看護、がん化学療法看護、乳がん看護、皮膚・排泄ケアなどがん関連領域分野の認定看護師教育課程を開設している7教育機関とした。

2. 調査方法

調査は、関連する先行研究や文献などをもとに、本研究者が作成した調査用紙を用いた質問紙法で行った。質問項目の作成に当たってはがん関連領域の専門家に助言を得た。質問内容は、施設の特性と講義内容および授業形態などに関するものである。具体的には、①設置主体、開設しているがん関連の認定看護分野、②教科目「看護倫理」の目的・目標、③科目担当者の所属、職位、専門分野、④看護倫理で提供している授業内容およびその授業形態、⑤現状での問題点や課題等である。データ収集は、各教育機関の責任者および「看護倫理」授業担当者へ調査の主旨説明および調査協力依頼を書面で行い、質問紙を同封し郵送した。調査期間は平成18年4月から平成18年5月であった。

3. 用語の定義

本研究では、サラ T. フライの定義⁵⁾を採用し、看護倫理を「看護実践に見いだされる道徳的現象」および倫理的問題を「倫理的思考や倫理的意思決定を必要とする状況、あるいは道徳的価値の対立」とした。

IV 倫理的配慮

研究計画書は、平成18年3月、横浜市立大学医学系研究倫理審査委員会承認を得た（番号6-18）。倫理的配慮としては、調査対象の施設長及び科目担当者宛に、「調査目的、調査内容、研究成果の公表、研究者の連絡先などについて説明した研究協力依頼書」および「情報の匿名性、データの保管および処理方法を保証する書面」を送付し、行った。

V 結果および考察

7教育機関中、4教育機関から回答が得られた（回収率57%）。

1. 対象教育機関の特性

4 教育機関の開認定看護分野は、がん化学療法看護 1 機関、乳がん看護 1 機関、皮膚・排泄ケア 2 機関であった。各教育機関における看護倫理担当者の特性は次のとおりであった（表 1）。

| 表 1 対象教育機関の特性 | | n=4 |
|---|-------|-----|
| 特 性 | 教育機関数 | |
| 開設している認定看護分野 | | |
| がん化学療法看護 | 1 | |
| 乳がん看護 | 1 | |
| 皮膚・排泄ケア | 2 | |
| 「看護倫理」担当者の特性 | | |
| 担当者の所属 | | |
| 専任と非常勤が担当 | 1 | |
| 非常勤のみで担当 | 3 | |
| 担当者数とその専門分野 | | |
| 1名：精神看護学・医療倫理学 | 1 | |
| 2名：がん看護 成人看護学・がん看護 | 1 | |
| 3名：看護管理・看護倫理 看護管理・皮膚・排泄ケア 高齢者看護学 | 1 | |
| 4名：がん看護 看護情報システム 医の倫理 インフォームドコンセント | 1 | |
| 教科目「看護倫理」の目標 | | |
| ①看護倫理の基本的な知識・概念の理解 人権・自己決定・倫理原則・アドボカシー インフォームドコンセント | 4 | |
| ②臨床で直面する倫理的問題の明確化・解決方法の提示 倫理的判断・倫理的意思決定 | 4 | |
| ③患者の人権擁護と自己決定権の尊重の理解 | 1 | |
| ④看護師の倫理綱領の看護実践の場における具体的適応 のための実践指針の作成 | 1 | |

「看護倫理」担当者の所属については、専任教員の教育機関は 1 機関、非常勤のみは 3 機関であった。担当教員数および担当教員の専門分野は、それぞれ、1 名で“精神看護学・医療倫理学”、2 名で“がん看護”および“成人看護学・がん看護”、3 名で“看護管理・看護倫理”、“看護管理・皮膚排泄ケア”および“高齢者看護学”、4 名で“がん看護”、“看護情報システム”、“医の倫理”および“インフォームドコンセント”であった。教科目「看護倫理」の教育目標は、4 教育機関が「看護倫理の基本的な知識とコア概念の理解」および「倫理的判断と意思決定能力を基礎として臨床で直面する倫理的問題の明確化・解決方法の提示」を設定しており、各々 1 機関が「患者の人権擁護と自己決定権の尊重の理解」と「看護師の倫理綱領の看護実践に場における具体的適応のための実践指針の作成」を設定していた。

認定看護師教育課程のカリキュラムは、共通科目、専

門基礎科目、専門科目、演習および実習で構成されており、「看護倫理」は各専門領域の共通科目で必須である。時間数は 15 時間と規定され、ねらい・内容等は各教育機関に任せられている。看護倫理の教育目標をみると、4 機関が共通して設定していたものは、“看護倫理に関する基本的な知識の理解と倫理的諸問題を的確に把握し判断し解決へ向けて対処する能力”であった。1968 年（昭和 43 年）のカリキュラム改正後、「看護倫理」は看護基礎教育の中で独立して教育されることはなくなった。現在、臨床の第一線で活躍する看護師の多くは看護基礎教育において十分な看護倫理教育を受けているとは言い難い。そのため、看護倫理を学ぶ上で前提となる人権、自己決定、倫理原則、アドボカシーなど倫理のコア概念や基本的知識の理解を教科目標に設定したものと考えられる。倫理的問題解決に向けて対処する能力については、近年、複雑で困難な医療における倫理的課題や臨床で看護師が遭遇する倫理的ジレンマ、基礎教育における不十分な倫理教育など様々な背景から、“倫理的問題を捉えられない”、“倫理的問題が分析できない”等の指摘がある^{6) - 8)}。倫理的問題への対処は看護ケアの質に影響することから、実践の場で牽引的役割を担う認定看護師に最も期待される能力のひとつと考えられる。従って、具体的に、直面している倫理的諸問題について状況を把握・分析し背景にある要因を明確にし、看護師としてとるべき行動を決定する“倫理的諸問題の解決へ向けての対処能力の習得”は必至であり、臨床のニーズに対応した教科目標と言える。

担当教員については、看護倫理が専門科目としてその専門家によって独立して位置づけられることが少ない現状では、非常勤講師が担うことはやむを得ない。関連領域の看護学の専門家によって教授されていることは望ましいと言える。

2. 教育機関で提供している看護倫理の授業内容の状況

看護倫理に関わる授業内容 21 項目について 4 教育機関で提供している状況を調査した結果、4 機関で提供されていた内容は「倫理原則」、「患者の権利」の 2 項目、3 機関で提供されていた内容は「アドボカシー」、「情報管理（個人情報保護法）」、「尊厳死・安楽死」、「QOL」、「インフォームドコンセント」、「日本看護協会：看護者の倫理綱領」、「ICN：看護婦の規律」の 7 項目、2 機関で提供されていた内容は「ケアリング」、「看護師が日常直面する倫理的問題」、「生命倫理」の 3 項目、1 機関のみで提供されていた内容は「研究と倫理」、「法的責任と倫理」、「遺伝子診断・治療と倫理」、「生殖医療と倫理」の 4 項目であった。4 機関全てで提供されていなかった内容は「看護の歴史」、「ナイチンゲール誓詞」、「臓器移植・脳死」、「安全と倫理」、「治験」の 5 項目であった（図 1）。

ほとんどの教育機関で提供されていた「倫理原則」や

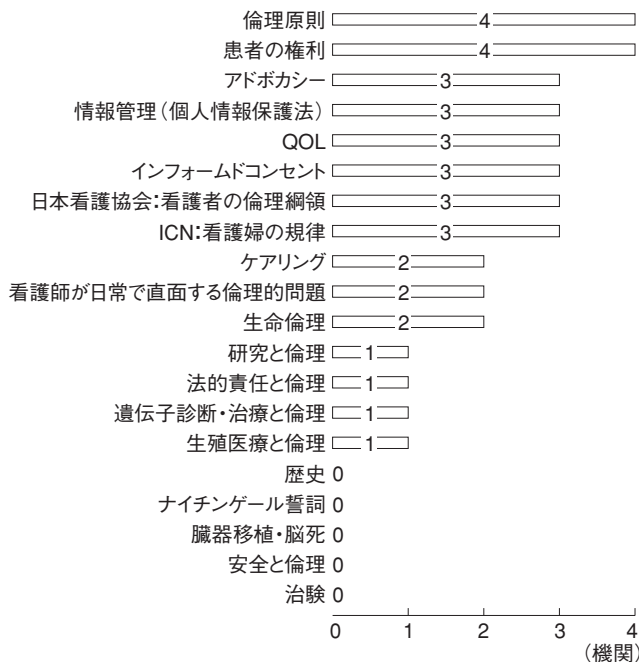


図1 看護倫理の授業内容提供状況

n=4 (教育機関)

「日本看護協会：看護者の倫理綱領」および「ICN：看護婦の規律」は、看護師の様々な倫理的問題への対応や倫理的行動の選択や拠り所に繋がるものであり、教育目標から考えて提供されるべき内容と言える。「患者の権利」や「アドボカシー」、「QOL」、「インフォームドコンセント」、「ケアリング」、「生命倫理」は看護倫理の主要な概念であり提供されるべき前提となる基本的な知識である。3機関で提供されている「情報管理（個人情報保護法）」や「尊厳死」、「安楽死」および各々1機関のみで提供されている「遺伝子診断・治療と倫理」や「生殖医療と倫理」、「法的責任と倫理」は今日的なトピックスである。今後対応に迫られる課題と考えられることから、提供する側の意図がうかがえる。一方、4つの教育機関全てで提供されていなかった「看護の歴史」、「ナイチンゲール誓詞」、「安全と倫理」、「臓器移植・脳死」などについては、重要であるが基本的な内容であり、基礎教育において提供されている水準のものと考えられる。「治験」については、すでに主体的な役割を担う専門家の治験コーディネーターの教育が行われていることが一因と推測される。

3. 授業内容と授業形態

授業には様々な形態がある。近年の看護倫理教育方法として、講義法のみでなく、グループワーク学習法（以後GWと略記）、事例検討など学習のプロセスに応じて段階的に授業形態を組み合わせ、取り入れ進捗することが必要と報告されている^{9) - 11)}。今回の調査結果からも、「講義法のみ」は64.1%で主流であるが、36%は「GWと事例検討の併用」、「講義と事例検討の併用」、「講義とGWおよび事例検討の併用」など授業形態を組み合わせ

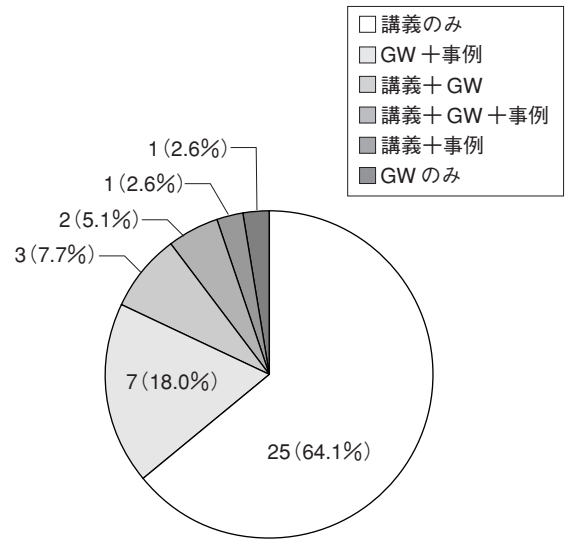


図2 看護倫理の授業形態

n=39 (%)

表2 看護倫理の授業内容とその授業形態

| 内容 (提供している教育機関数) | 講義 | グループワーク学習 | 事例検討 | 教育機関数 |
|-------------------------|----|-----------|------|-------|
| 1 倫理原則 (4) | ● | | | 3 |
| | ● | ● | ● | 1 |
| | ● | | | 1 |
| 2 患者の権利 (4) | ● | ● | | 1 |
| | | ● | ● | 1 |
| | | ● | | 1 |
| 3 アドボカシー (3) | ● | | | 2 |
| | | ● | ● | 1 |
| 4 情報管理(個人情報保護法) (3) | ● | | | 3 |
| | ● | | | 2 |
| 5 尊厳死・安楽死 (3) | | ● | ● | 1 |
| 6 QOL (3) | ● | | | 2 |
| | | ● | ● | 1 |
| 7 インフォームドコンセント (3) | ● | | | 1 |
| | ● | ● | | 1 |
| | ● | | ● | 1 |
| 8 日本看護協会:看護者の倫理綱領 (3) | ● | | | 2 |
| | ● | ● | | 1 |
| 9 ICN:看護婦の規律 (3) | ● | | | 3 |
| 10 ケアリング (2) | ● | | | 2 |
| 11 看護師が日常で直面する倫理的問題 (2) | ● | ● | ● | 1 |
| | | ● | ● | 1 |
| 12 生命倫理 (2) | ● | | | 2 |
| 13 研究と倫理 (1) | ● | ● | | 1 |
| 14 法的責任と倫理 (1) | ● | | | 1 |
| 15 遺伝子診断・治療と倫理 (1) | | ● | ● | 1 |
| 16 生殖医療と倫理 (1) | | ● | ● | 1 |

●：選択している授業形態

た方法が選択されていた（図2）。4教育機関で提供している授業内容とその授業形態をみると、具体的には次のような結果であった（表2）。「倫理原則」、「アドボカシー」、「QOL」、「ケアリング」、「生命倫理」、「日本看護協会：看護者の倫理綱領」、「ICN:看護婦の規律」などの主要概念や「情報管理（個人情報保護法）」、「尊厳死・安楽死」、

“法的責任と倫理”などの今日的なトピックスは「講義法のみ」が多く、“看護師が日常で直面する倫理的問題”や“患者の権利”など自分の知識や能力を活用し素材について自分の考えを持ち深めていくものは、「講義法、GW学習法、事例検討法などの併用」が多かった。つまり、質の高い授業を提供するには、教育目標、学生の状況、教材の種類などを考慮した上で授業形態を選択し展開する必要がある。講義法は、教員から学生に学習内容を直接提示できる長所があり、概念の獲得や知識の習得が主目的である教育においては最も基本的な授業形態であるが、講義法の短所として、知識の部分的収集や学生相互の関係の欠落など注入教育が指摘されている¹²⁾。GW学習法は、講義による一方的なコミュニケーションとは異なり、学生間の相互行為や協同作業が重視され、明示された課題に対して、既習の知識を用いて働きかけたり新たな発見でその内容を充実させたりする授業形態である。事例検討は、講義法やGW学習法の次の段階として、事例の解釈を通して、事例の展開や事例の持つ問題点などを議論する授業形態である。従って、看護倫理教育方法として提言されているように、講義により看護倫理に関する基本的な知識を習得し、GW学習によって他の学生との協同作業や相互行為を通して学習内容が広がり深められ、かつ看護倫理を考える動機付けとなる。その動機付けを基盤に事例検討によって、事例に潜んでいる背景要因を検討し倫理的問題を明らかにして、看護職としてとるべき行動を決定し態度表明する。授業形態の選択は教育効果の点において重要な意味を持つ。以上、述べて来たことから、各教育機関の科目担当者は、看護倫理に関する基本的な知識および倫理的諸問題の明確化、看護職としてとるべき行動を決定する能力の習得という目標に即した授業内容の提供および適切な授業形態を選択し、組み合わせ授業展開していることが推察される。

4. 担当者の考える問題点・課題

現状の問題点や課題などに関して、「15時間という時間数の少なさでの限界がある」、「具体的には講義法やGW学習法、事例検討という形態をとっているが事例を深める検討が出来ていない」、「臨床で十分活用できる水準まで到達できない」、「自己の経験した倫理的問題を取り上げ分析できる準備が十分出来ない」などの回答がのべられた。一方、「現状で行われている内容でよい」という意見もみられる。つまり、15時間という規程の時間数では方略においても限界があり、目標水準の到達は困難であること、他方、現在の制限の中で行っている内容については十分であるという指摘である。倫理的能力は判断力と倫理観や態度等によって構成され、看護倫理教育は、看護基礎教育から卒後教育・継続教育を通して育むものである。従って、認定看護師教育課程では「看護倫理」を、継続教育へ繋げていく基盤という位置づけのもとに、

15時間という枠の中で取り上げる内容の厳選と効果的な学習方略の工夫が今後とも必要と考える。

VI 結論

がん関連領域の認定看護師教育課程：教科目「看護倫理」の教育内容や授業形態などに関して次のような知見を得た。

- 1) 看護倫理の教育目標は、4教育機関とも看護倫理の基礎的な知識の理解と、倫理的諸問題について状況を把握・分析し背景にある要因を明確にし、看護職としてとるべき行動を決定する能力の修得を設定していた。
- 2) 提供されていた教育内容は、倫理原則・患者の権利・アドボカシー・ケアリングなどの看護倫理のコア概念や基本的知識、看護職者の行動の拠り所となる日本看護協会：看護者の倫理綱領やICN：看護婦の規律情および最近のトピックスである情報管理（個人情報保護法）・遺伝子診断/治療と倫理・生殖医療などであった。
- 3) 授業形態は、概念や知識伝達型の講義法が主流であるが、教育目標や倫理という教科目の特性から、学生自身が既習の知識を活用し状況を分析推論し看護職としてとるべき行動を決定する能力を育成するよう、「講義法やGW学習法および事例検討」を選択し、組み合わせる試みがなされていた。

VII おわりに

認定看護師教育課程において提供されている教科目「看護倫理」の実態を明らかにすることは、がん関連領域の認定看護師の継続教育における倫理的能力の育成を検討する上で不可欠であり、その継続教育を検討する上で必要な基礎的資料を入手する点で意義がある。本研究にご協力下さいました教育機関の代表者および看護倫理担当の教員の皆様に深く感謝申し上げます。

本研究は平成17年度文部省科学研究費補助金基盤研究(C)の助成によって行われた。なお、一部は第26回日本看護科学学会学術集会において発表した。

文献

- 1) 横尾京子，片田典子，井部俊子，他：日本の看護婦が直面する倫理的課題とその反応，日本看護学会誌. 13 (1)：32-37, 1993.
- 2) 岡谷恵子：日本看護協会看護倫理検討委員会：看護業務上の倫理問題に対する看護職者の認識 日本看護協会調査より，看護. 51 (2)：26-31, 1999.
- 3) 田口玲子，宮坂道夫，藤野邦夫：わが国における〈看護倫理〉の動向－最近8年間の医学中央誌 CD-

ROM版によるキーワード検索をとおして、新潟大学医学部保健学科紀要. 7 (2): 249-255, 2000.

- 4) 真壁玲子：がん看護学領域における研究の動向と課題 過去5年間（1998～2002年）に看護系学会誌2誌に掲載された研究論文，日本がん看護学会誌. 17 (2): 13-19, 2003.
- 5) Fry, Sara T(1994)／片田範子，山本あい子(1998)：看護実践の倫理 倫理的意思決定のためのガイド，日本看護協会出版会，東京.
- 6) 岡本恵里：がん看護・ターミナルケアにおける倫理的問題 看護者・看護学生が抱える倫理的問題状況への悩みと対処行動，臨床看護. 28 (5): 57-662, 2002.
- 7) 梅田恵：倫理的ジレンマと看護職の役割 一般病棟における倫理的ジレンマと看護職の役割，日本がん看護学会誌. 17 (2): 39-41, 2003.
- 8) INR日本版編集委員会：臨床で直面する倫理的諸問題. 日本看護協会，東京，2001.
- 9) 山田聡子，波多野梗子，小野寺杜紀，他：基礎教育における看護倫理教育の実態，看護教育. 40 (3): 204-208, 1999.
- 10) 石井トク：生命倫理の教育方法について考える，看護教育. 31 (9): 528-534, 1990.
- 11) 白浜雅司：医療職をめざす学生の倫理的感受性をいかに育てるか，医学生への臨床倫理教育の経験から，看護教育. 41 (4): 260-266, 2000.
- 12) 杉森みどり，舟島なをみ：看護教育学. 医学書院，東京：212-216, 2006.